

【研究ノート】

地域におけるボランティア活動に対する意識調査 ～町会夏祭りを例として～

澤辺桃子, 鈴木英悟, 松田賢一

A Survey on Consciousness of volunteer activities in a local area A case study of summer festival of our town

Toko SAWABE, Eigo SUZUKI, Kenichi MATSUDA

1. はじめに

地域貢献は、地方短期大学の基盤となるもののひとつである。大学の責務は、教育、研究並びに社会貢献（産学官連携、国際交流、地域貢献）であると2005年中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」¹⁾に明示され、「地（知）の拠点整備事業」（2013 年度文部科学省が本格的実施）においては、地域貢献は単なる社会貢献の一形態ではなく、大学の教育、研究、社会貢献の方向性を定める際の基本方針として位置づけられている²⁾。本学も地域の課題（ニーズ）と大学の資源（シーズ）のマッチングにより、課題改善・解決に向けた活動を全学的に進め、地域に必要とされる短期大学であり続ける努力が必要となる。そこで、本学が地域の様々な課題に応えられる体制を整えていくためには、地域におけるボランティア活動に関して、地域住民と本学との意識差（考え方の差）を明らかにし、お互いを理解することが欠かせない。本研究では、地域貢献のひとつとして、高齢化により運営が困難となってきた町会夏祭りへのボランティア活動を一例に、本学学生、教職員、地域住民の3者それぞれが、地域のボランティア活動に対してどのような意識をもったのかを調査し、今後の課題を明確にすることとした。これら調査結果を関係者が共有することは、継続的な地域貢献に役立つと考える。

2. 方法

(1) 町会夏祭り準備

平成28年6月～7月に合計3回の町会夏祭り実行委員会が開催され、昨年度の内容および反省等から、今年度の企画内容について検討された。

本学の担当教員及び代表学生も本実行委員会に出席し、本学が協力できる内容について地域住民と議論した。

食物栄養学科1, 2年生は、卒業必修科目において問題発見解決型学習（Problem-Based Learning: PBL）を取り入れ、地域の課題発掘（第1回PBL）、地域の課題解決の討論（第2回PBL）、課題解決となるイベント企画考案（第3回PBL）、イベント企画発表（第4回PBL）について各ゼミナール（SL）を1チームとして競争的に実施した。各ゼミナール（SL）の担当教員は、ファシリテーターとして、中立的な立場から、学生主体のPBLを支援した。これらの学習を通して、地域貢献の意識を高めるとともに、発表されたイベント企画を学生全員の投票にて選定し、町会夏祭りで実現可能なイベント企画を町会夏祭り実行委員会に提案した。保育学科学生については、日頃より、地域の様々な施設へのボランティア活動が活発であるため³⁾、ボランティア部を中心に町会夏祭りのボランティア参加者を募ることとした。準備日となった平成28年8月2日は、教員2名、男子学生6名がボランティアとして参加し、町会実行委員とともに、櫓及びテントを設営並びに椅子（約30脚）と机（約10台）を搬入し、設置した。

(2) 町会夏祭り当日

平成28年度の町会夏祭りは、8月5日、6日の2日間となり、本学より延べ90名がボランティア（教職員26名、学生64名）として参加した。活動内容は、子どもお神輿引率、食物栄養学科の夏祭りイベント企画実施、夜店手伝い、盆踊り参

加等であった。

返却した。町会実行委員とともに教員3名、男子学生12名にて作業を実施した。

(3) 町会夏祭り片付け

片付け日は、町会夏祭りの翌日、平成28年8月7日であり、櫓及びテントの解体、椅子（約30脚）、机（約10台）並びにその他機材を搬出し、

(4) アンケート調査

アンケート調査に使用した無記名のアンケートは、本学学生、教職員、地域住民の3者で共通の

別紙1

高丘町会夏祭りボランティア等に関するアンケート調査のお願い

高丘町会夏祭りボランティア等を通じて、あなたが感じたことを調査しています。調査結果を地域貢献に関する活動および研究目的以外に使用することは一切ありませんので、以下の質問にお答えください。ご協力よろしくお願いいたします。

I. あなた自身について 当てはまる番号に○をつけてください。

1. あなたの性別をお答えください。

性別：(男性 ・ 女性)

2. あなたが属するグループはどこですか？

①高丘町民 ②函館短大 学生(食物栄養学科 ・ 保育学科) ③函館短大 教職員

3. あなたは、今年の高丘町会夏祭り(準備・片付けを含む)に参加しましたか？(見学のみも“参加した”とする)

①参加した (⇒ 4へ) ②参加していない (⇒ 5へ)

4. 3で①“参加した”と答えた方へお聞きします。町会夏祭り(準備・片付けを含む)の印象はどうでしたか？

①楽しかった(次回も参加したい) ②普通(どちらでもない) ③楽しなかった(次回は参加しない)

5. 3で②“参加していない”と答えた方へお聞きします。町会夏祭りに参加したかったですか？

①参加したかった ②どちらでもない ③参加したくない

II. ボランティア活動について 3で①“参加した”と答えた方は、高丘町会夏祭りでの自己評価

②“参加していない”と答えた方は、過去のボランティア活動の自己評価

ボランティア活動未経験者は、大切に思うことを(意見)の欄に記入する。

| 項目 | 評価 (3点満点) | 評価理由に○をつけ、具体的な意見もご記入ください。 | |
|-----|----------------|---|------|
| 達成度 | 3 ・ 2 ・ 1 | ・事前準備： 十分 ・ 普通 ・ 不十分 ・当日： 十分 ・ 普通 ・ 不十分 ・片付け： 十分 ・ 普通 ・ 不十分 | (意見) |
| 協調性 | 3 ・ 2 ・ 1 | ・事前準備： 十分 ・ 普通 ・ 不十分 ・当日： 十分 ・ 普通 ・ 不十分 ・片付け： 十分 ・ 普通 ・ 不十分 | (意見) |
| 積極性 | 3 ・ 2 ・ 1 | ・事前準備： 十分 ・ 普通 ・ 不十分 ・当日： 十分 ・ 普通 ・ 不十分 ・片付け： 十分 ・ 普通 ・ 不十分 | (意見) |

その他の意見・感想があればご自由にご記入ください。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

Fig.1 アンケート様式

様式 (Fig. 1) を用いた。

平成28年8月22日に第4回目となる町会夏祭り実行委員会が開催され、決算報告及び今年度の反省等の意見交換がなされた。その際に、アンケート用紙を配付し、記入後、回収したもの (合計15枚) を地域住民の意識調査結果とした。

食物栄養学科では、平成28年9月に町会夏祭りに参加した学生による実践内容の発表 (第5回PBL) を各学年で行った。本発表会後にアンケート調査を実施した。保育学科でも学年ごとにアンケート調査を実施し、これら合計281枚を学生の意識調査結果とした。教職員にはアンケート用紙を配付する形式とし、期間を決めて回収した合計24枚を教職員の意識調査結果とした。

ボランティア活動の自己評価については、町会夏祭りに限らず、過去に参加したボランティア活動も含めたものとして、「事前準備」、「当日」、「片付け」の3区分で、「達成度」、「協調性」、「積極性」の3項目を3段階「十分」、「普通」、「不十分」で評価した。また、区分ごとの3段階評価結果が統計的に有意か否かを確かめるため、有意水準5%、両側検定のt検定を行った。

3. 結果と考察

回収したアンケートの総数320枚を本学学生、教職員、地域住民のグループ分けて各項目の集計を行った。アンケート回答者の男女比とその区分をFig. 2に示した。回答者のうち、町会夏祭りのボランティア参加者は、学生16.1%、教職員45.8%、地域住民86.7%であった (Fig. 3)。参加者には、参加後の感想を尋ね、様々な理由にて町会夏祭りに参加できなかった不参加者には、参加の意思について回答を求めた。参加者の感想については、「楽しくない」の回答はゼロであった。また、学生及び教職員では、男女問わず「楽しかった」との回答が「どちらでもない」を上回った (Fig. 4)。この結果から、町会夏祭りボランティアへの参加により、各自が有意義な時間を得ることができたことが伺える。参加者の中で、地域住民の女性のみ、「楽しかった」との回答よりも「どちらでもない」の回答が多く、女性ならではの夏祭りに対するきめ細やかな準備とその苦勞が楽しさを超えるものであった可能性が示唆される。不参加者の参加への意思については、学生、教職員のグループで「参加したくない」との回答がみられ

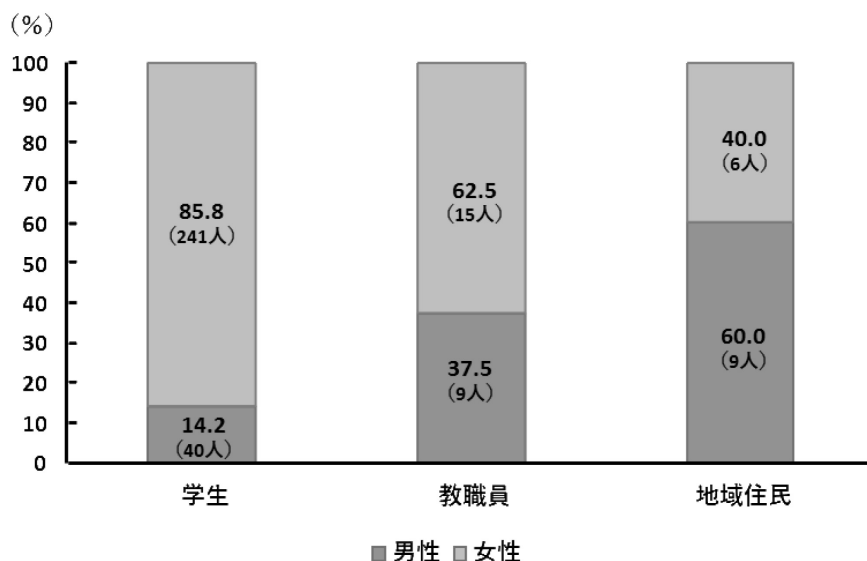


Fig. 2 アンケート回答者の男女比

(全体 n=320, 学生n=281, 教職員 n=24, 地域住民 n=15)

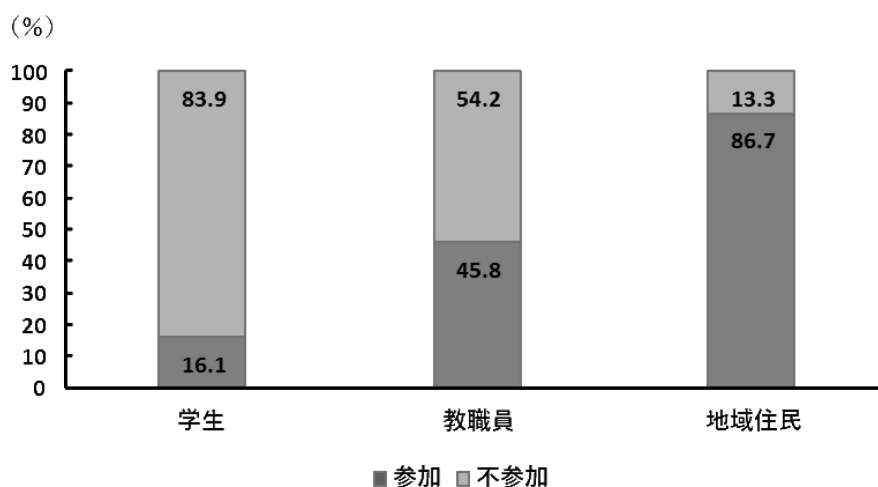


Fig. 3 町会夏祭り参加者割合

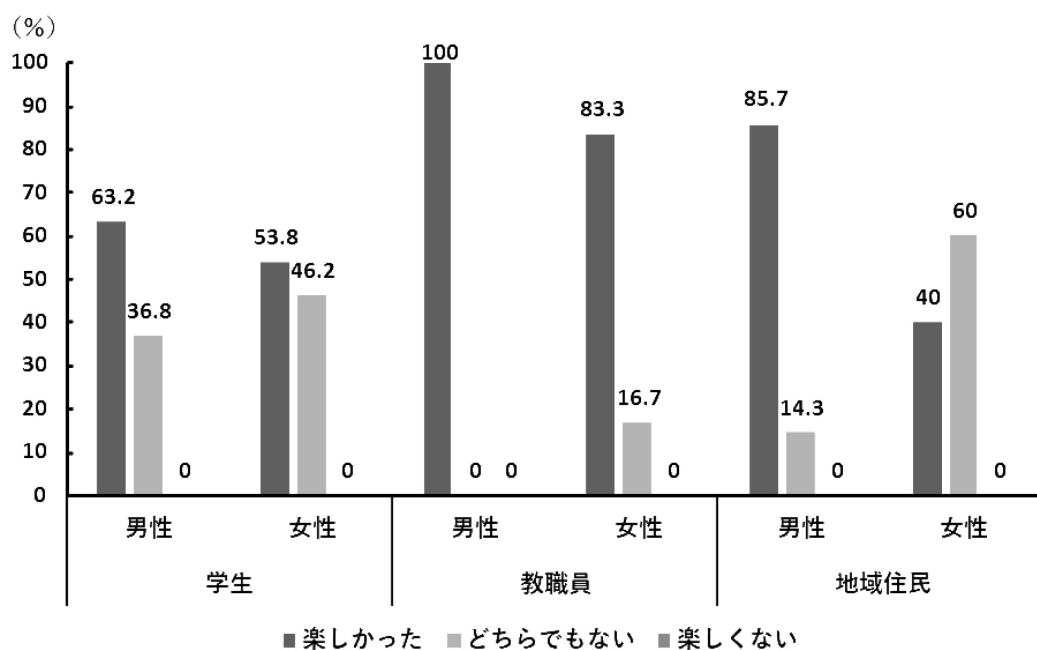


Fig. 4 町会夏祭り参加者の感想

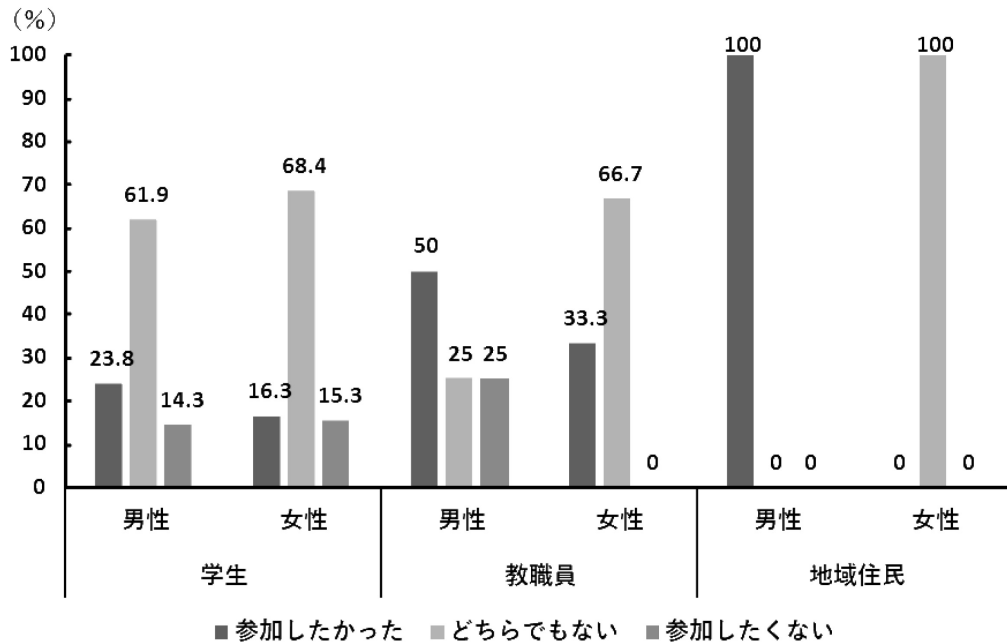


Fig.5 町会夏祭り不参加者の参加への意思

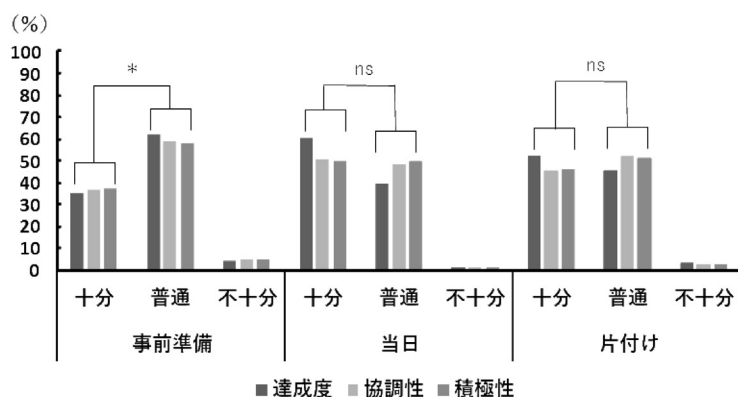
たが、地域住民については、ゼロであった (Fig. 5)。この結果から、町会夏祭りボランティア活動に「参加したくない」と考えている人が、学生および教職員には一定数存在しているが、地域住民については、参加することが当たり前のこととして理解されていると考えられる。

次に町会夏祭りに限らず、過去に参加したボランティア活動等全般について、自己評価した結果をFig. 6 A～Cに示した。学生については、「事前準備」において、「達成度」、「協調性」、「積極性」の3項目に対し、「十分」と回答した割合と「普通」と回答した割合に有意差があり (有意水準5%両側検定, $t(4) = -17.4$, $p = .00006$), 「当日」、「片付け」では有意差は見られなかった。教職員については、「十分」と回答した割合と「普通」と回答した割合で有意差のある区分はなかったが、「事前準備」と「片付け」において「不十分」との回答が25～41%程度みられた。地域住民については、「事前準備」と「当日」において「十分」と回答した割合と「普通」と回答した割合に有意差 (有意水準5%両側検定, $t(4) = -9.2$, $p = .0007$,

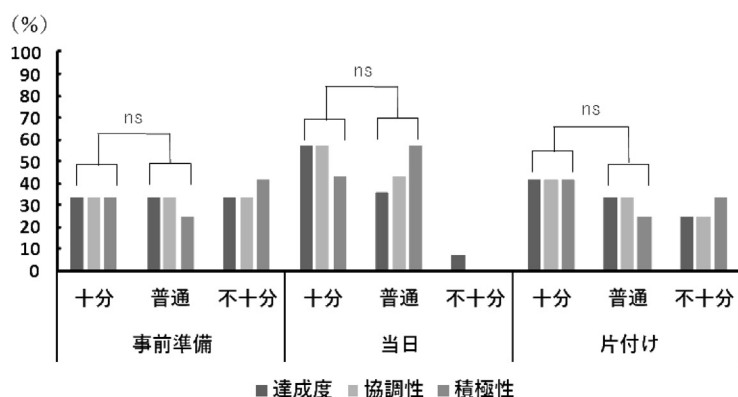
$t(4) = -5$, $p = .007$) があり、現状に満足していないことがわかる。学生、教職員、地域住民のいずれのグループでも、「当日」において「不十分」と回答した割合はほとんどなかった。これらの結果から、学生は、事前準備をより充実すべきと感じていると考えられ、地域住民については、現状に満足しておらず、事前準備と合わせて当日の完成度を高めたい意向が読み取れる。教職員は、事前準備と片付けに協力する機会を求められていると考えられる。

以上より、本学が地域ボランティア活動を行う際には、地域住民とその活動の到達点と理想型を明確にした打ち合わせを十分に行い、学生および教職員に活動内容に関する情報を提供して事前準備の機会を設けること、また、教職員に対しては事前準備及び片付けを含めた活動全体のスケジュールとその内容をあらかじめ知らせておくことが重要であるといえる。これら得られた課題を3者で共有し、次のボランティア活動に生かすことで、それぞれの立場で高い自己評価がもてる活動になると結論付けられる。

A : 学生



B : 教職員



C : 地域住民

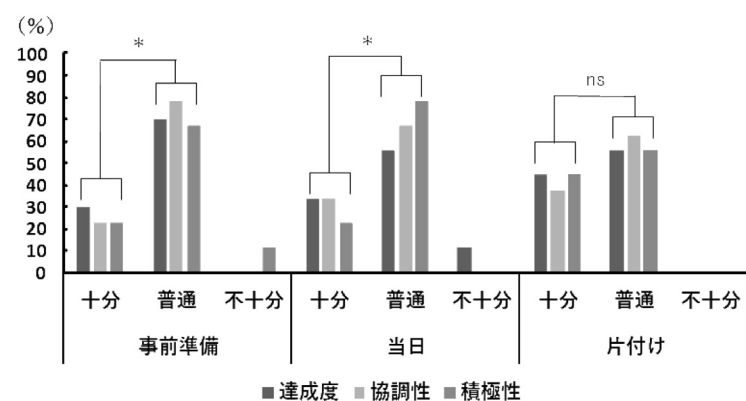


Fig. 6A, B, C ボランティア活動についての自己評価

* : $p < 0.05$, ns : not significant

4. まとめ

地方短期大学の基盤となる地域貢献において、本学が地域の様々な課題に応えられる体制を整えていくためには、地域住民と本学との意識差（考え方の差）を明らかにし、お互いを理解することが欠かせない。そこで、本研究では町会夏祭りへのボランティア活動を一例に、本学学生、教職員、地域住民の3者それぞれが、地域のボランティア活動に対してどのような意識をもったのかを調査し、今後の課題を明確にすることで継続的な地域貢献に役立てることとした。

回収したアンケート（総数320枚）を本学学生、教職員、地域住民のグループに分けて各項目の集計及び分析を行った結果、次の課題が明らかとなった。ボランティアへの参加により、各自が有意義な時間を得ることができたことが伺える一方、不参加者の参加への意思については、「参加したくない」と考えている学生および教職員が一定数存在していた。また、ボランティア活動等全般についての自己評価では、学生は、事前準備を、地域住民は、事前準備と当日の完成度を高めたい意向が読み取れた。教職員は、事前準備と片付けに協力する機会を求めている。

以上より、本学が地域ボランティア活動を行う際には、地域住民が考える活動の到達点と理想型を明確にし、学生および教職員に事前・事後を含む活動全体のスケジュールとその内容に関する情

報を提供しておくことが重要であるといえる。これらの課題を3者で共有し、次のボランティア活動に生かすことで、それぞれの立場で高い自己評価がもてる活動になると結論付けられる。

5. 謝辞

本調査にあたり、町会夏祭りのボランティア活動及びアンケート協力等を快く受け入れていただき、本学に多大なご支援を賜りました高丘町会会長 武下秀雄様並びに夏祭り実行委員の皆様に深く感謝申し上げます。

6. 引用文献

- 1) 中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」(答申)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm
- 2) 豊田光世, 内平隆之, 井関崇博, 中嶋一憲. 大学の地域貢献活動の教育効果に関する考察: Enactus の事例をもとに. 兵庫県立大学環境人間学部研究報告. 2014. 16, 59-66.
- 3) 松田賢一. 資料「函館短期大学の学生ボランティアによる地域経済効果」. 平成28年9月26日